

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 22 日現在

機関番号：34428

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2014

課題番号：23593433

研究課題名(和文)訪問看護における地域リスクマネジメントネットワーク構築に関する研究

研究課題名(英文)A study on the risk management network construction in visiting nursing

研究代表者

後閑 容子 (Gokan, Yoko)

摂南大学・看護学部・教授

研究者番号：50258878

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,000,000円

研究成果の概要(和文)：訪問看護師に対して、リスクの頻度とその内容を明らかにするために無記名自記式質問紙調査を実施した。その結果、患者または家族からの暴言を言われた経験、性的いやがらせを受けた経験、暴行を受けた経験などを有していた。多くの訪問看護ステーションはリスクマネジメントのマニュアルを作成していたが、リスクに対する教育をしていなかった。このような実態に基づき、訪問看護師へ、リスクへの対処とステーションにおけるマネジメントのあり方についての研修会を開催した。参加した訪問看護師はリスクへの対処に関する関心を高めることができた。さらに、継続した研修と相談の確保など地域における連携の必要性について示唆を得た。

研究成果の概要(英文)：To clarify the risk of harm for the visiting nurses, the anonymous self administered questionnaire was carried out. As a result, the nurses have experienced verbal abuse by patient or their families, sexual harassment and violence. Over 70% of home health care facilities provide a manual detailing risk management for nurses, but only 28% of them prepared education programs regarding risk control for nurses. We held a workshop about the risk management for visiting nurses at local area. Participated nurses (47 nurses in Gifu area) have interest in the risk of harm for nurses and risk control. Furthermore, the suggestion of necessity of cooperation in continuing educational program for visiting nurses in the region.

研究分野：地域看護

キーワード：訪問看護師 リスクマネジメント 質問紙調査

1. 研究開始当初の背景

平成 21 年度の訪問看護年間受給者数は約 375,000 人で、これに携わる訪問看護師数は約 30,000 人である。今後、高齢社会において、在宅医療の需要は増大することが予測され、訪問看護師の質を向上し、良質な看護を提供することは重要な要件である。その中で、良質な訪問看護を提供するには、訪問看護師が安心して看護を提供できる安全な環境づくりも重要な要因の一つであり、ここにリスクマネジメントの重要性がある。訪問看護師のリスクには、看護師の安全確保と看護上の過誤とがある。研究者らは、平成 11 年全国的な疫学的調査を実施し、訪問看護師のリスクマネジメントとして、交通事故、療養者や家族からの暴言、暴力等の現状を把握し、ストレス改善と予防対策に関して提案をしてきた。しかし、小規模事業所が多い訪問看護ステーションは広域に広がって散在し、短時間雇用の勤務形態をとる看護師が多いといった現状のため、個別の訪問看護ステーションでのリスクマネジメントには限界があり、以下のとおり、多くの問題を抱えている現状がある。

* リスクを抱える訪問看護師への対処とその支援システムの不足

* 小規模訪問看護ステーションでは個別の対処に限界がある

* 小規模訪問看護ステーションは広域に散在し、ステーション間の協力体制ができていない。

* 訪問看護師は 1 人でリスクに向き合い、対処することが多く、ストレスが大きい。

* 組織間安全管理システムの構築がまだない

このような問題がある訪問看護ステーションのリスクマネジメントであり、訪問看護師のリスクを総合的にサポートする地域的な組織間ネットワークを構築した地域リスクマネジメントネットワーク体制は、未だ構築されていない。リスクマネジメントでは、Reason のモデルに基づく環境要因を加えたサブシステムとして、個人、チーム、組織・管理、組織外環境、技術を定義している。このような組織間の相互作用と社会環境の体制作りにより、小規模訪問看護ステーションの看護師のリスクマネジメントに寄与する。

2. 研究の目的

本研究は 2 次医療圏を基盤とした小規模な訪問看護ステーションを対象とした訪問看護リスクマネジメントのネットワークシステムの構築と評価を目的としている。訪問看護師の安全確保では、看護師のストレス改善に向けた支援が個別の訪問看護ステーションでは困難であり、地域におけるネットワーク化した支援体制づくりを必要としている。そこで、この訪問看護リスクマネジメントネットワークシステムは 3 つの機能すなわち、訪問看護の地域リスクマネジメントネット

ワーク体制づくりとその評価、訪問看護師の教育研修、訪問看護師の相談の各機能を含む。

3. 研究の方法

(1) 訪問看護ステーション看護師のリスクに関する疫学調査

訪問看護ステーションに勤務する看護師のリスクに関する意識、経験、リスク要因に関する調査を全国の訪問看護ステーションを無作為抽出により実施し、実態把握とリスク要因の分類を試みる。

(2) 2 次医療圏内訪問看護ステーションの看護師の教育の体系化とその評価

2 次医療圏内の訪問看護ステーションに勤務する看護職員のリスクマネジメントの研修体制、研修内容の体系化を図り、研修を実施し、その効果評価を行う。

4. 研究成果

(1) 訪問看護ステーション看護師のリスクに関する疫学調査 (その 1)

調査方法; 郵送法による自記式質問紙調査
調査時期; 2011 年 10 月~11 月。 調査対象者; 1141 か所の訪問看護ステーションに勤務する看護師 1 人。全国訪問看護事業協会に加入する訪問看護ステーション約 5,400 か所のうち 25% を等間隔抽出した。なお、震災の影響を考慮し福島県、宮城県、岩手県の訪問看護ステーションを調査対象から除いた。
調査内容; 看護師の年齢、勤務年数、受け持ち患者数等、移動手段と移動中の事故、患者宅及び移動中の環境、患者や家族からうけたリスクとその状等

(2) 結果; 449 (有効回答率 39.4%) の有効回答を分析対象とした。回答者の平均年齢は 45.47 歳であった。彼らは平均 7 年間の訪問看護師の経験を有していた。32.7% の回答者は家庭訪問途中の移動で、交通事故の経験を有していた。

54.6% の者は患者または家族からの暴言を言われた経験があった。31.4% の者は性的いやがらせを受けた経験があり、18.34% の者は暴行の被害を受けた経験を有し、15.7% の者は患者や家族から脅かされた経験があった。44.17% の者は患者が精神的に混乱状態であったり、38.79% の者は興奮状態の患者と遭遇したりした経験を有していた。

74% の訪問看護ステーションはリスクマネジメントの詳細なマニュアルを用意していたが、28.6% の訪問看護ステーションしかリスクに対する教育をしていなかった。

結論: 多くの訪問看護師が、患者や家族からのリスクを経験していた。今後、職場における教育のプログラムの開発をして、看護師への予防的な対策をする必要性を示唆された。

(2) 訪問看護師のリスクに関する調査 (その 2)

目的; 訪問看護師が訪問時に安全を脅かす

リスク内容とその頻度について、2001年調査結果と2011年調査結果とを比較した。

方法；訪問看護師のリスクに関する2001年に実施した調査結果（以下2001年）と2011年に実施した調査結果（以下2011年）を比較した。両調査とも郵送法による自記式無記名質問紙調査である。2001年調査は、全国の訪問看護ステーション（以下ステーション）名簿から25%抽出したステーション898か所の訪問看護師4783人を対象にした。有効回答数の1574人（有効回答率32.9%）を分析対象とした。2011年調査は、全国訪問看護事業協会の加入者から25%抽出したステーション1141か所の訪問看護師1141人を対象とした。有効回答数の449人（有効回答率39.4%）を分析対象とした。項目は・訪問看護師の年齢、勤務年数など、・訪問看護師が遭遇したリスクの内容とその頻度、・リスクのあった事例の概要等である。t検定及び χ^2 検定を行い有意水準は0.05とした。

結果； χ^2 ：訪問看護師としての平均勤務年数は、2011年は7年（SD4.69）であり、2001年の2.38年（SD2.38）と比べて有意に高かった。 χ^2 ：訪問開始前の情報収集に関しては、患者の暴力的行為の事実歴、患者宅での動物の有無、患者の薬物乱用歴の有無、家庭内の不安定な関係などは、いずれの項目において、2011年が2001年と比べて有意に多くの看護師が情報収集していた。訪問開始前のリスクに関する教育の実施割合は、2011年は2001年に比べて有意に多かった。 χ^2 ：患者及び家族からの危険な言動に出会った経験の有無は以下の通りであった。ア患者・家族からの暴力の経験有（2011年18.3%、2001年5.8%）、イ患者・家族からの暴言の経験有（2011年54.7%、2001年30.1%）、ウ患者・家族から性的いやがらせ行為を受けた経験有（2011年31.5%、2001年14.8%）、エ患者の精神的混乱状態の経験有（2011年44.2%、2001年23.2%）等であった。

考察；2011年は、2001年と比べて、訪問看護師の経験するリスク頻度は増加していた。特に患者や家族からの暴言、暴力、性的いやがらせ行為など、今後の対応策を考える必要がある。訪問前の情報収集および看護師への教育の実施率は向上しているが、さらなる充実が期待される。

（3）訪問看護師のリスクマネジメントのネットワーク構築に向けて、教育および相談支援についての検討。

目的；リスクマネジメント教育内容、相談へのニーズを把握する機会として、訪問看護師のリスクマネジメント研修会を実施した。リスクマネジメント予防と対策に関する教育を実施し、その成果、感想を把握した。

研修会の実施概要

研修会には、岐阜県内訪問看護ステーションに勤務する訪問看護師47名が出席をした。参加者は訪問看護師の経験が1年の新任から

15年以上のベテランまでいた。

結果；参加者の70%が、何らかのリスクに遭遇した経験を有していた。経験したリスク内容は次のような内容だった。

ア：患者の転倒や観察不足のための症状悪化など看護上の過誤もしくはかごにつながる恐れがあること。例えば、肺音や腸音の観察の不足や不確かさ、患者がトイレ歩行時に急に意識を喪失したこと、リハビリテーション時の転倒、判断ミスをしていないかという不安、実施した看護や医療処置への不安など

イ：針刺し事故、交通事故

ウ：利用者からの暴力や暴言など、特に認知症の患者からの暴力に怖いと思いながら訪問していること。

研修の教育内容では、リスクの予防策として、コミュニケーションのあり方、記録のあり方、中止する（言う）勇気、マニュアルや体制等の環境づくり、エビデンスに基づく手法をもちいること、情報共有、確認と調査、などを重要視していた。主なものは以下のとおりである。

ア：特に、記録に関しては、マニュアルの検討をし、記録の内容を正確にするための学習や用語の統一など職場の体制づくり、看護師自身の記録への認識、記録する技術の獲得（誰が見ても分かる記録の仕方、正しい言葉の使用）などを再確認していた。

イ：情報共有をすることや、「わからないことを聞ける勇気」「わからないことを調べる努力」などの学習とともに職場での環境づくりも重要であることを上げていた。職員同士の人間関係も重要であることを指摘していた。

ウ：訪問看護は一人で行うことが多いので、疑問に思ったことを同僚や関係者に発信して行くことも重要であると認識していた。

今後の教育として希望する内容は次のようなものがあつた。

ア：管理学とリスクマネジメント、リスクマネジメントの基本

イ：リスク回避の具体策、具体例、実際の対応など、日常の業務に即した具体的な方法を勉強する希望

ウ：医療事故の実態とその対応策など

（4）研修会を実施して、今後のリスクマネジメントネットワーク事業としてのあり方の検討

リスクマネジメントの対処に関するマニュアル本の作成（わかりやすく、使いやすいもの）

継続的な研修会の開催

それぞれのステーションでの対策や改善などを出し合う交流会の開催

（5）今後の活動に向けての課題

訪問看護におけるリスクマネジメントネットワーク構築としての事業として、継続的な研修会や交流会を持つことの必要性が示唆された。訪問看護ステーションの看護師間で

のネットワークを構築することが、リスクマネジメントにつながることを考える。

5. 主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計2件)

1) Yoko Gokan, Takako Ishihara, Tomomi Koketsu, Mariko Tamaoki, The nurse's risk of harm in the home health care in Japan, 8th International Nurse Practitioner/Advanced Practice Nursing Network Conference, Helsinki, Finland, 18-20 August, 2014, Poster,

2) Yoko GOKAN, Takako ISHIHARA, Hisako ADACHI, Naomi NAKAGAWA, Role of nurses caring for patients with terminal cancer living in rural Japan, 17th International Conference on Cancer Nursing, Prague, Czech Republic, 9-13th September, 2012

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

後閑容子 (GOKAN YOKO)
摂南大学・看護学部・教授
研究者番号：50258878

(2) 研究分担者

石原多佳子 (ISHIHARA TAKAKO)

岐阜大学・医学部・教授
研究者番号：00331596

(3) 連携研究者

()

研究者番号：